

「はと」より「鳩」のほうが実在の鳩に結びつきやすい

私たちは、「梅干し」という言葉を聞きますと、その言葉を耳にただけで、あたかもそれを目の前にし、あるいはさらにそれを口にしたかのように、口の中に酸いものがわき出るのを覚えます。これが、“言葉”というものの働きです。

だから、“言葉を習得する”ということは、自分の経験したものについて、それを思い起こすための“信号”を設ける、ということになります。たとえば、「鳩」という言葉を覚えるということは、実在する「鳩」、経験によって知りえた「鳩」そのものを、頭の中に思い浮かべるための「はと」という“音声信号”と結びつけて、頭に記憶することです。

鳩そのものと、「はと」という音声を結びつける仕事は、決して、容易なものだということではできません。それは、鳩の絵を見て、自分の経験の中にある鳩を思い出す仕事に比べたら、ずっとむずかしいものです。

鳩そのものと、「はと」という音声を結びつける仕事に比べたら、「鳩そのものと、「鳩」という漢字とを結びつける仕事は、ずっとやさしい。」ということができましよう。

なぜならば、「はと」という、発声されるやすぐに消えてしまう“聴覚”に訴える音声よりも、「鳩」という、鳩そのものと同じく“視覚”に訴える文字のほうが、記憶に留まりやすいのは当然だからです。

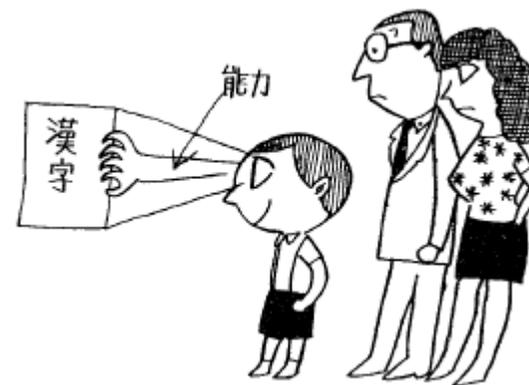
まして、その漢字が、「門」や「山」「川」のような象形文字であったなら、

その字形がその実体と結びつきやすい形をしているので、記憶しやすいことは明らかです。

事実、本書の初めに紹介いたしましたように、幼児たちは、ただほんの一瞬、関心をもって漢字に目を触れただけで、覚えようという意識も努力もなしに、その漢字が何を意味するか、それが何を思い浮かべる信号であるかを理解し、記憶してしまいます。

この事実をもってすれば、三歳の幼児に漢字を学習させることは、決して早すぎるものではないことが、よくわかりいただけると思います。

漢字を覚える能力においては、三歳から五歳くらいまでの幼児が最も高いということが、多くの学者たちの実験でも、また私の実験でも、確かめられています。その能力には、おとななどはとても太刀打ちできません。



幼児の漢字を覚える能力はおとなも太刀打ちできない